第Ⅲ章　「できる」を目指した授業実践研究

１　実践研究準備：教育課程への導入

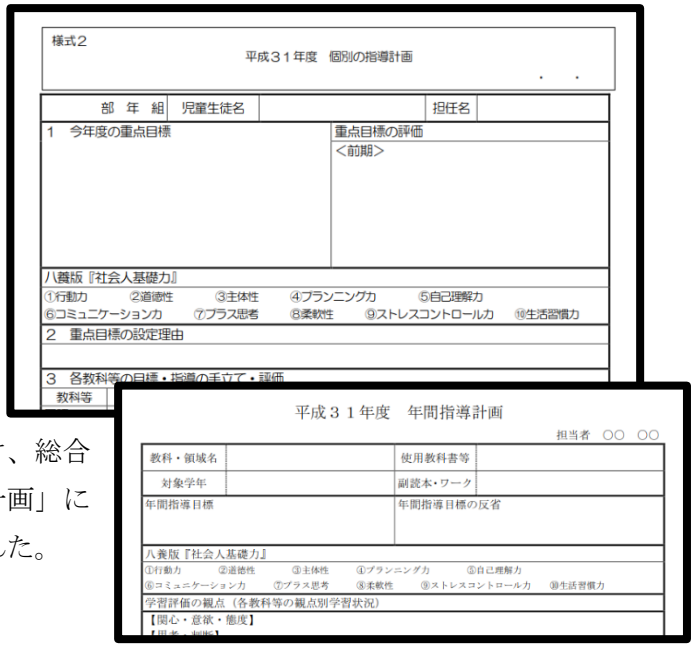
平成 30 年度の研究では、新学習指導要領の理解や本校児童生徒の実態や将来の生活の理解を進め、本校の教育実践の目的を整理した。令和元年度では、この目的である「志」や八養版「社会人基礎力」の向上を図る、「できる」を実感できることを目指した授業の実践研究を推進した。

実践に入るに当たり、ここまでの検討成果である「志」等の実際の教育活動への導入など、年度末や年度初め、研究日の前半にいくつかの準備を行った。準備に際しては教務部に協力を依頼し、教務部長と協議を重ね、以下の点に注意して方法を整えることとした。

（１）今年度限りでなく今後も継続・維持していけるように、児童生徒及び職員の負担にならないように提示や導入を行う。
（２）「目的・目指すもの」としての設定であり、各種目標などの参考として活かせるような提示をしていくとともに、無理に短期間で評価するようなことはしない。
（３）本校のカリキュラム・マネジメントの一部として機能するように整理していく。

1-1　個別の指導計画、年間指導計画への導入

教務部に協力を依頼し、児童生徒の「個別の指導計画」および各教科の「年間指導計画」の書式を検討し、八養版「社会人基礎力」の欄を設定した。どちらも、10 の基礎力から〇を付けるだけでよい選択式を採用した。


様式2
平成３１年度　個別の指導計画
部　年　組　児童生徒名　担任名
1　今年度の重点目標
重点目標の評価
<前期>
八養版『社会人基礎力』
①行動力　②道徳性　③主体性　④プランニング力　⑤自己理解力
⑥コミュニケーション力　⑦プラス思考　⑧柔軟性　⑨ストレスコントロール力　⑩生活習慣力
2　重点目標の設定理由
3　各教科等の目標・指導の手立て・評価
教科等

平成３１年度　年間指導計画
担当者　〇〇　〇〇
教科・領域名　使用教科書等
対象学年　副読本・ワーク
年間指導目標　年間指導目標の反省
八養版『社会人基礎力』
①行動力　②道徳性　③主体性　④プランニング力　⑤自己理解力
⑥コミュニケーション力　⑦プラス思考　⑧柔軟性　⑨ストレスコントロール力　⑩生活習慣力
学習評価の観点（各教科等の観点別学習状況）
【関心・意欲・態度】

1-2　キャリア教育全体計画への導入

「志」と八養版「社会人基礎力」の意義を受け、総合支援部からの協力があり、「キャリア教育全体計画」に「志」と八養版「社会人基礎力」の欄が設定された。
（※資料６「キャリア教育全体計画」）

1-3　児童生徒への提示

新学習指導要領では、主体を児童生徒としており、「志」と八養版「社会人基礎力」も職員だけでなく児童生徒自身が目指し、向上していくためのものとして検討してきたことから、日々の活動に活かせるように学習目的として直接提示を行った。

（１）教室掲示　前年度までは各教室に学校教育目標を掲げていたが、それに代わって掲示することとした。掲示に当たっては、できるだけわかりやすくイメージできるように図案化を図った。（※資料７「教室掲示用「志」＆八養版「社会人基礎力」デザイン」）
（２）説明　入学式翌日の学級活動の時間に行った。説明に当たっては研究部が各教室を回り、本校の勉強で卒業までに向上し、身に付けることを児童生徒自身が目指すものとして、教室掲示した図案を示しながら行った。また、目指すものとして学級目標や個人目標の参考にしてほしいことを提案し、後日の評価アンケートの依頼も行った。目標の参考にする児童生徒の可能性も考え、資料５の名称を児童生徒向けに変更し、合わせて配布した。

1-4　グランドデザイン作り

前年度に引き続き、新学習指導要領の理解と実施準備に向けた検討として、カリキュラム・マネジメントの実現のために、学部の目標やそれに対する指導体制等の構成を図式化したグランドデザインの作成を行った。

・方法　グループ協議（KJ 法）：研究日計２回

体制や人数構成の違いから、学部単位での検討・作成とした。中学部と高等部は２グループに分け、それぞれで検討し、次の回で共有・再構成を図った。様式は、前年度の教育課程研究協議会で使用された髙木展郎氏の「2017　学校のグランドデザイン（縦版）」で、学校教育目標の他、「何ができるようになるか」には八養版「社会人基礎力」を、「目指す子供の姿」には「志」を、事前に記入された状態から協議を始めた。

・結果　各学部でのグランドデザインが完成した（※資料８「全学部のグランドデザイン」）。多少の違いはあったが、どの学部も児童生徒の育成に向けた手立てや支援方法、実現のために必要な物事について確認・共有を図ることができた。完成したグランドデザインは、職員室にしばらくの間掲示した。

1-5　年間単元計画一覧表の作成

当初の計画では、各教科等の年間指導計画をもとに、全学部全教科等の単元一覧表の作成を行い、教科等横断や学部縦断の視点で整理してより良いカリキュラムを目指す予定だったが、以下の点から検討準備状況等不十分と判断し、実施を見送った。

・教科等横断の視点は、目指す目標や資質・能力によって行うべきものだが、各年間指導計画には単元・題材で何を目指すかまでの記載がない。
・仮に単元名、題材名のどちらかで整理するにしても、Ａ類型（準ずる教育）は教科書のタイトル、Ｂ類型（知的代替）やＣ類型（自立中心）でも教科によって単元・題材名の記載方法が異なっており、整理するための統一視点が図れない。
・本校の学習類型は３つあり、学部も小中高まである。同じ類型でも学年が違えば同じ教科でも別授業を行っている学部もあり、訪問学習やベッドサイド学習の児童生徒もいる。この学校で年間の表を作ると児童生徒ほぼ全員分の１４通りになってしまう。

今回は実施を見送ったが、状況整備がなされたのちには、一覧表作成などで教科等の連携を図りたいと考える。今回の研究においての教科等横断の視点は、以降の授業の実践研究検討に含むこととした。

２　「できる」を目指した授業の実践研究

ここまで新学習指導要領の理解や本校の教育実践での基礎作り、準備を行ってきた。それを踏まえ、今回の研究の最大目的である「できる！」「できた！」を児童生徒が実感でき、また教師が「子どもに〇〇の力をつけることができた！」と言える、「将来の生活に【生きる力】の育成」を目指した授業の実践研究を推進した。

第Ⅲ章　「できる」を目指した授業実践研究

2-1　手立て

（１）計画ルール設定

・「できる」「できた」という児童生徒の自己有用感・達成感などにつながることを目指すこと

・将来の生活に生きる【資質・能力】の育成を目指すこと

・新学習指導要領の観点や要点をふまえること

・単発の授業ではなく、単元で計画すること

（２）フレームシートの利用

・新学習指導要領の要点・観点等を踏まえられるように、単元検討を行うための様式を提示した。

【フレームシートの説明】（※資料９「授業計画フレームシート（原版）」①②③）

①単元計画を検討する上で、考える順番を整理した様式です。
②新学習指導要領で提示されている要点を踏まえ、考える内容や視点が整理できるように構成しました。
③指導案を書くときの要素にもつながるように整理しています。
④記入量が多くなるため、具体的な授業の流れや中身については省いています。別途各自で検討するようにしてください。
⑤作業量を抑えるため、プルダウンあるいは自動で文言が入るようにしています。
⑥シートは「教科用」「自立活動用」「合わせた指導用」の３種類があります。
⑦計画は「単元」で考えてください。場合によっては半年や１年単位での単元でも可能です。
〔補足〕
※シートは新学習指導要領の観点・要点を押さえるためのもので、これ自体に「できる」「できた」の要素はありません。「できた」は指導の工夫次第です。
※シートの項目は全て埋める必要はありません。単元により必要な項目を検討してください。

（３）協力グループ

・実践研究自体は各職員個人がそれぞれの授業で行うが、初任者や新赴任者も多く、相談・助言体制としてグルーピングを行った。教科等横断的視点からの指導も検討可能になると考える。

・対象児童生徒をもとに、研究グループを構成した。

2-2　推進計画

（１）フレームシートの説明

（２）研究グルーピング

（３）グループワークその１

①対象児童生徒の発達段階や特性、及び学習上の特性を確認・共有

②対象児童生徒の課題の共有

③フレームシートの「０　対象の実態」の欄の記入

（４）グループワークその２

①個人で授業での目標と単元内容を検討

②グループ内で、実践で目指す「できた」や「基礎力」、あるいは「題材」から、教科等横断や学部等縦断を相談※グループ内にいる人の教科でなくても可　※必ず横断・縦断する必要はない

・横断で育成する力の視点、縦断でのキャリアの視点の検討

・該当する授業の年間指導計画の確認・調整・適当な時期への修正

・単元での観点別目標や単元・題材の概要等の相談・検討

③フレームシートの「１　目標」「２　単元内容」の欄の記入

④単元指導時期・期間決定

（５）グループワークその３

①実践の具体的計画の検討・グループでの相談

・「３　指導の工夫」の検討

・「４　支援や配慮等の工夫」の検討

・「５　活用する教材や資源」の検討

②「６①～③　評価基準・方法」の検討・相談

（６）各自実践

各職員で実践を進める。実践の結果である各授業計画フレームシートについては、個人情報保護の観点から紀要には掲載せず、校内のファイル・サーバーにて保存・管理する。この紀要には、「０対象の実態」の欄を削除した研究授業のシートのみ掲載する。

（７）グループワークその４

①各自実践の評価

②「６④～⑥　評価」の記入・相談

③「７　次に向けた改善点」の検討・相談

（８）各評価アンケート実施

2-3　研究授業

各実践の中から、代表２名の研究授業発表を行った。また、その授業を踏まえた研究協議を行った。

（１）研究授業対象・教科・指導者

・研究授業１　　小学部６年（知的代替過程）　音楽　　神原　幸男

（※資料 10「授業計画フレームシート・学習指導案①（小・音楽）」

・研究授業２　　高等部２年（準ずる過程）　　数学　　工藤　翔太

（※資料 11「授業計画フレームシート・学習指導案②（高・数学）」）

（２）研究協議

・方法　グループ協議（KJ 法）

・協議内容

①「できた（達成感）・できる（自己効力感）」につながる指導・支援

②児童生徒の将来像につながる授業

・協議結果　一部抜粋して掲載する。

協議結果は授業者のみならず、参加した職員全員で共有し、各自の授業に般化させていくことを確認し、協議を終えた。

【研究授業１グループ】協議結果

①「できた・できる」につながる指導・支援

〈良かった点〉

・課題を明確に提示し、見通しが持てる授業作り＝「発表」というゴール、目標の流れ

・本人のペースに合わせた指導方法

・プラスの言葉掛け、場面ごとの賞賛により、自信を持って取り組めていた。

・一曲をやりきる「達成感」が大切

〈改善点〉

・身体や動きに合わせた補助具、台等の工夫があるとよい。

・動画を取り、自分の演奏や歌を見て、上達した様子を見られるようにする。

・課題設定の工夫＝ちょっと頑張ればできるもの、結構頑張る必要のあるものを設定する。

②児童生徒の将来につながる授業

〈良かった点〉

・小学部段階ではできるうちに体験が大切。　・余暇につながるという視点が良い。

（改善点）

・さまざまな曲（教科書の曲・アニメ・ポップス）にふれると良い。

・さまざまな楽器にふれる（腕の動きのあるうちに・経験の一つとして体が覚える）

→音楽が「好き・楽しい」と思える授業作り→余暇にさらにつながる（拡大・充実）

【研究授業２グループ】協議結果

①「できた・できる」につながる指導・支援

〈良かった点〉

・PC の環境＝筆記のみではない　・PC データ＝提示物としてはよい

・活動に対して広がりが考えられている→数学的活動をどう般化するか。

・再確認することで、自分の自信につながる→自己肯定感につながる

〈改善点〉

・柔軟な思考が苦手なので、間違えたときにほかの方法を提示するとよい。

・促し「どう？」の言葉掛け→つまずいていたら補足説明するとよい。

・どう作ったか「どうしてそう考えたか」＝作品説明を深く考えさせる場面が欲しい。

・会話に対して「考えを引き出す」（対話的）意味づけ、価値づけ

・多面体の良さをどう伝えるか←示してあげる←ICT でどう引き出すか。

②児童生徒の将来につながる授業

〈良かった点〉

・授業を般化させたこと

・将来の選択肢の提示

・コミュニケーションの広がり

〈改善点〉

・基礎的な知識が取れていたか→自立活動とのバランス

３　成果と課題（研究の評価と改善に向けて）

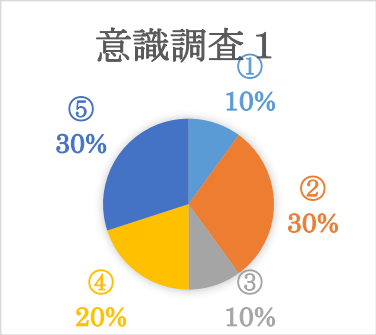
これまで取り組んできた研究の評価として、成果と課題のまとめを行った。まとめる上で、「志」と八養版「社会人基礎力」を提示されて実際に授業を受けた児童生徒と、授業実践研究に取り組んだ職員双方からの評価アンケートを行い、また授業実践研究に取り組んだ研究グループでの協議を行った後、その協議結果から研究部で中心となる課題を導き出し、解決への方策の検討を全体協議で行った。

3-1　児童生徒評価アンケートから

以下の項目に対する回答が得られた。

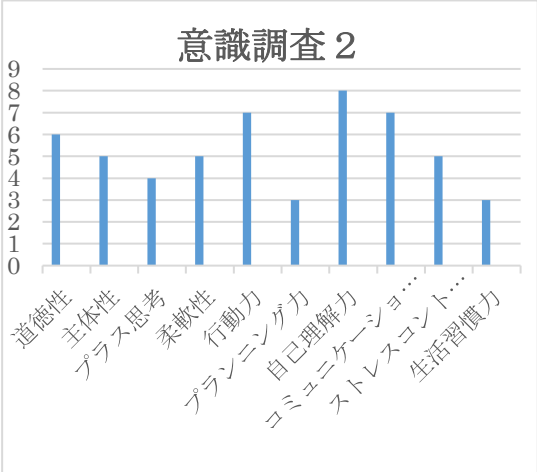
（１）「志」と八養版「社会人基礎力」に対する意識

①目標作りの参考にし、常に目指す意識を持った。（１）
②目標作りの参考にし、ときどき目指し、反省などで確認した。（３）
③目標を考えるときの参考にはした。（１）
④よくわからなかった。（２）
⑤意識していなかったけれど、自然に取り組んでいた。（３）



（２）「基礎力」の中で「良くなった」と感じる項目

①道徳性（６）　②主体性（５）
③プラス思考（４）　④柔軟性（５）
⑤行動力（７）　⑥プランニング力（３）
⑦自己理解力（８）　⑧コミュニケーション力（７）
⑨ストレスコントロール力（５）　⑩生活習慣力（３）



（３）授業で「できる！」や「できた！」を感じたか

【　ある（９）・良く覚えていない（１）・ない（０）】

（４）将来必要な力や気持ちだと思うこと

・あきらめない気持ち　・目標に向かう気持ち　・自分で理解する　・がんばる気持ち
・勉強をする　・自分を信じる心　・上司に失礼のないように接する　・自分の意見をはっきり言う
・道徳性（２）　・主体性（３）　・自己理解力（２）　・ストレスコントロール力（２）
・生活習慣力（２）　・コミュニケーション力（２）　・行動力　・プランニング力

（５）学びたいと思う学習内容や、して欲しいと思う授業のやり方

・理科の実験　・ゴルフ　・楽しい授業　・調べ学習　・ｅスポーツ　・絵を描く活動
・プログラミング　・練習時間（問題）を増やしてほしい（２）　・体育で有名な選手に会いたい
・「〇〇だから〇〇」という根拠を持って教えてほしい。
・「〇〇の時に役立つ」等、将来との繋がりを明示されると、勉強のモチベーションになる。
・興味のあることを実際にやってみる授業。進路検討や、将来の可能性につながると思う。

「志」等は今年度から提示したものであり、一概に正確な調査とは言えないが、アンケートの結果から、約半数以上は「志」や八養版「社会人基礎力」の内容を理解し、それを目指したり目標等で学習活動に活かしたりしていたと考えることができる。また、児童生徒自身が将来必要だと考える力や気持ち、学びたい内容や授業の指導方法など参考になる意見が得られた。

3-2　職員評価から

研究に対して評価アンケート調査を実施した。得られた回答における自由記述での意見を以下のように整理した。

（１）研究全体の内容自体
・研究の柱を共通理解し、子供一人一人について丁寧に捉えられた。
・フレームシートを基にして研究を進めたことで、計画的に研究授業を行うことができた。
・授業研究対象の児童生徒ごとにグルーピングしたのは、研究を進める上でやりやすかった。
・準ずる教育の教科指導では、要点を再確認し、さらに「できる」につなげる工夫を考えられた。
（２）研究内容の規模と職員内での共通理解
▲「志」と「社会人基礎力」の活用の仕方を教員一人一人が理解できていなかった。
▲４月に説明があった以降は、教室提示されているだけで、効果的に活用することができなかった。
▲「社会人基礎力」などは１年で結果が出るものではないので、研究の成果としてまとめることが難しく、必要なことではあったが、テーマが研究には不向きだったか。
▲取り組む内容が多岐にわたっていたので、もっと絞り、精選してもよかった。
（３）フレームシートについて
▲児童生徒の実態把握や指導指針の整理、日頃の学習指導法などの意識を確認、改善することができたが、作成に追われてしまうことが多かった。量の精選ができるとよい。
▲フレームシートを作成するのに時間はかかったが、目標や指導の根拠が、だれが見ても分かる形になったのが良かった。また、明確にすることで、より自信を持って指導を行うことができた。
▲グランドデザインやフレームシートの作成は、指導目標やそれに対する指導体制等を考えるために有効ではあったが、作成や活用の意図を教員間で共通理解を図ることが難しく、一人一人が能動的に研究に参加することができなかったように感じる。
▲授業計画フレームシートは情報を精選すれば、普段の授業計画を立てる際にも使えると思う。
▲内容としては良かったが、書式として書くことが多く、研究部としては「すべて埋めなくてもよい」という指示だったとは思うが、取り組みに結構な労力がかかった。

研究内容自体は評価も高く、取り組み方法も全体的には良く評価されていた。だが、研究推進方法・取り組み方法への意見が多く寄せられた。以下のように反省をまとめる。

（１）研究の目的・方針の共有が不十分だった。また、欲張りすぎて研究規模が大きくなってしまった。目的・方針の共有が図れる規模に主題を絞っても良かった。
（２）「志」等の効果的な活用方法の検討ができていなかった。今後も継続していくならば、効果的な活用方法の検討が必要である。
（３）フレームシートでの授業検討自体は有効ではあったが、使用目的・使用方法の確認が不十分だった。また、構成の精査が不十分で検討量が多く感じられてしまう構成になってしまっていた。負担に感じないような構成にする必要がある。

この職員評価の結果・反省は次年度以降の研究推進に向けて引き継ぎ、生かしていくこととする。

3-3　研究結果に対するグループ協議

２年間の研究に対する「評価」として、成果と課題、改善の方策についてグループ協議を行った。

・方法　グループ協議及び発表交流

授業実践研究で組んだ２～４名の全 11 の小グループで行った。少人数であるので、KJ 法などの方法は取らず、時間のみ設定し、協議シートをもとに各グループで自由に議論を行った。

・内容　以下の項目を設定、「成果」、「課題」、「改善の方策」の３点に対する話し合いを行った。

（１）将来に求められる児童生徒が目指すものの検討、教育活動・教育課程への導入について

・「志」および「八養版社会人基礎力」の設定や内容は適切だったか。また児童生徒への提示や指導計画等への導入は教育的効果があったか。

（２）授業実践研究に対して

①研究の取り組み方やフレームシートの内容は適切だったか。

②「志」や八養版「社会人基礎力」の向上を目指し、教育活動に実際に反映し、「できる（自己効力感）」「できた（達成感）」を感じられる指導実践を進めることができたか。

（３）研究仮説に対して

・「できる」や「できた」を感じる授業実践は、児童生徒の主体的に生きる姿勢につながるか。「志」と「社会人基礎力」の教育活動への導入や指導は、研究仮説の『将来の生活に「生きる（活かせる）力」を育み、より良く生きようとする児童生徒の育成』につながるか。

・結果　協議結果を発表し合い、全体で共有した。結果は研究部で整理した。以下の通りである。

<u>（１）将来に求められる児童生徒が目指すものの検討、教育活動・教育課程への導入について</u>

【成果】・児童生徒、職員の互いが共通意識を持てる。

・目指す視点が明確化された。教員間での指導の共通理解も図りやすい。

【課題】・児童生徒に対しての意識付け。実態により理解不十分な児童生徒もいる。

・「志」と八養版「社会人基礎力」の位置づけや活用方法・指導方法・評価の整理。

【方策】❶児童生徒への提示

・学部集会等で統一した形での全体提示。あるいは月間目標と合わせた取り組み。

・各授業単元や行事等でつながる具体的目標の提示と振り返り時間の設定。

❷項目内容や段階の設定

・各学年・学部段階で何を身につけていくのか段階設定表の検討。

・「志」及び八養版「社会人基礎力」の内容見直し時期設定の検討。

❸位置づけと指導方法と評価

・全体、教科部会等での目指すものの確認と指導方法や評価方法の研究・研修。

・児童生徒の目指した項目（志・力）の、次年度への引き継ぎ。

<u>（２）授業実践研究に対して</u>

<u>①研究の取り組み方やフレームシートの内容</u>

【成果】・新学習指導要領をもとに取り組むことで、指導の根拠を明確に、実態把握や手立て・工夫の視点を持ち、授業の組み立てなどプロセスを踏んだ指導の検討ができた。

・「志」や八養版「社会人基礎力」を目指すことで、一貫性のある授業につながり、また教育活動全体で、「子どもにつけたい力は何なのか」という教師の意識を高めた。

【課題】・フレームシートの項目量。
・他グループの取り組みを知る機会。具体化が個人あるいはグループ内完結。
・他教科との関連性。

【方策】❶フレームシート
・項目の精選・精査。実態記載欄の省略など。
❷取り組み方法
・研究主題、内容の焦点化。
・授業見学の活性化。
・深化・般化へのアプローチの検討。

②「志」や「基礎力」の教育活動への反映、「できる」「できた」を感じられる指導実践推進

【成果】・授業実践自体は、普段の取り組みと大きく変わることではないが、自分の実践を整理し、学習成果をもとに考察したり議論を深めたりすることができた。
・目指すものを知り、段階的に課題を提示、計画し、「できる」「できた」を達成できる授業実践を積み重ねることで、児童生徒の自信につながった。

【課題】・授業での「志」や「基礎力」への取り組み方、達成度の評価。
・「できる」「できた」と「志」や「社会人基礎力」の関連性。
・「できる」「できた」を次の単元での活用、日常への般化。
・教科間の関連の深化。

【方策】❶各教科等の年間計画の整理
・今年度導入した「基礎力」の項目は継続。
・教科等横断や学部縦断での連携やつながりを持った年間計画の作成。
❷「志」と「基礎力」の教育課程上の位置づけや取り組み方検討
・評価は年間計画における「基礎力」を踏まえた各教科の目標の達成で評価できるか。
・各単元終了時に振り返る時間の設定。

（３）研究仮説に対して

【成果】・「できる」が児童生徒の自信や次への意欲につながり、自ら生きていく態度につながる。
・目指すものの「言語化」で、「学校」として意識の統一を図れた。また、各授業での目標の達成が「～の育成」につながり、将来に生きる力の育成につながる道筋ができた。

【課題】・児童生徒への「将来」や「目指すもの」への意識付け。
・卒業先、環境変化や機能低下まで見据えた、病弱教育での将来に本当に必要な力の模索。
・病弱特別支援学校としての「社会に開かれた」教育課程の編成。

【方策】❶「志」や「社会人基礎力」の扱い
・単年度で結論付けず、継続した提示・確認。および児童生徒の実態に合った説明。
・卒業先との共有
❷指導方法・実践方法について
・担任を中心に病棟と連携を取り、卒業後に必要な力を共有する。
・研究結果を教育課程に定着させ、日常の実践に般化し、今後も「できる」を感じ、「志」に至る教育実践を心掛けていく。
・教科等横断、教科等連携による効果的な指導の検討。方法や環境の工夫、教科とそれ以外（自立・総合・道徳等）との連携も今後より一層の必要性を感じる。

3-4　今後の教育実践に向けた最終協議

グループ協議の結果から、今後の本校教育実践に活きる課題として、「志」や八養版「社会人基礎力」の活用を中心的課題として捉え、協議を深めることとした。

・テーマ　「志」と八養版「社会人基礎力」の今後の教育課程での取り組みについて
・方法　グループ協議（KJ 法）及び発表交流：これまでの授業検討グループではなく、経験等を考慮した上で５人程度６グループに分かれて行った。
・内容　以下の３点の検討項目を設定し、協議を行った。

（１）児童生徒への提示方法	（２）指導上の具体的方策	（３）評価方法

・結果　全体に提案という形で発表を行い、共有を図った。協議結果は以下の通りである。

（１）児童生徒への提示方法

・児童生徒の実態に合わせた方法を検討（児童生徒がより理解しやすいように説明）
　→単元の学習や、行事などの目標設定の際の活用
・視覚化（＝掲示）すること（具体的に）
・提示の場面は、日々の授業の中、単元の導入時、自立活動、行事や集会活動、ホームルームなど
・教師間の共有も重要
・定期的に評価

（２）指導上の具体的方策

・指導上のねらいの明確化
・教科間の連携（教科横断的な視点の活用）
・児童生徒本人が変容に気付ける取組み＝視覚化
・学習の振り返りの実施
・児童生徒の生活への般化
・教師間の連携、共通認識、共有

（３）評価方法

・児童生徒の自己評価（授業毎、行事後）
・他者評価の活用
・達成度の視覚化
・個別の指導計画、教育支援計画の妥当性の検討
・児童生徒の変容の共有
・目指す姿の共有
・数値化で客観的に
・評価基準の明確化、基準の共有
・教科間、各行事や単元との関連
・評価の時期の検討（毎時、単元終了時、学期終了時、学年終了時）

以上の結果をもとに、今後の教育課程改善や教育実践の向上に活かしていく。